国立大学法人熊本大学

熊本大学
Kumamoto University

平成３０年５月２３日

報道機関　各位

熊本大学

「取り繕い反応」はアルツハイマー病の特徴的なコミュニケーションのパターン

（概要説明）

認知症の方では、記憶障害によって生活に様々な影響が出ているにもかからず、上手に周囲に合わせて応答をする「取り繕い反応」がみられます。熊本大学臨床医学教育研究センターの松下正輝特任助教らは、取り繕い反応が認知症の中でもアルツハイマー病の方に特に多くみられることを初めて明らかにしました。本研究の成果は、アルツハイマー病の特徴的な症候を示唆するもので、認知症の方の理解を深め、より良い支援の方法の確立に貢献することが期待されます。

本研究成果は文部科学省科学研究費補助金の支援を受けたもので、平成３０年５月２３日米国東部時間１４時（日本時間５月２４日（木）午前３時）に科学雑誌「PLOS ONE」に掲載されます。

（説明）

アルツハイマー病をはじめ認知症の方では、記憶障害により社会生活上様々な問題が起きているにもかかわらず、上手に相手に話をあわせて、忘れてしまったことを憶えているかのように振る舞う態度がみられることがあります。

このようなコミュニケーションのあり方を「取り繕い反応」といい、認知症の治療やケアに関わる方々のあいだでは、とても良く知られた反応のひとつです。これまでに、取り繕い反応に関して数多く記述されていましたが、それらの報告のほとんどは医師や看護師、臨床心理士などの経験や印象に基づくもので、実証的データに乏しいものでした。

今回の研究では、認知症の原因となる4つの病態、アルツハイマー病（107名）、脳血管障害を有するアルツハイマー病（16名）、レビー小体型認知症（30名）、軽度認知機能障害（55名）において、認知機能検査の際にみられる取り繕い反応を、先行研究の定義に基づいて評価し、その出現頻度を比較しました。その結果、アルツハイマー病では、実に半数以上の方に取り繕い反応がみられ、レビー小体型認知症や軽度認知機能障害の方と比較して統計的有意に多くみられることが明らかになりました（図1）。さらに、性別や推定罹病期間、認知機能と前頭葉の機能に関する検査の結果を統計的に調整して取り繕い反応を比較した結果、アルツハイマー病では、レビー小体型認

知症の4.24倍、軽度認知機能障害の3.48倍、取り繕い反応がみられることがわかりました。

取り繕い反応は、認知症になった自分を何とかしてよく見せようとする行動であり、そこにはさまざまな心理的葛藤が関与していると思われます。本研究は、取り繕い反応の疾患特異性に関する報告であり、正確な診断やより良い医療とケアの確立に貢献することが期待されるとともに、アルツハイマー病の方の心理的葛藤に配慮し、認知症を患っても以前と変わらぬ生活ができるよう支援するために、本研究の知見が役立てられるものと思われます。

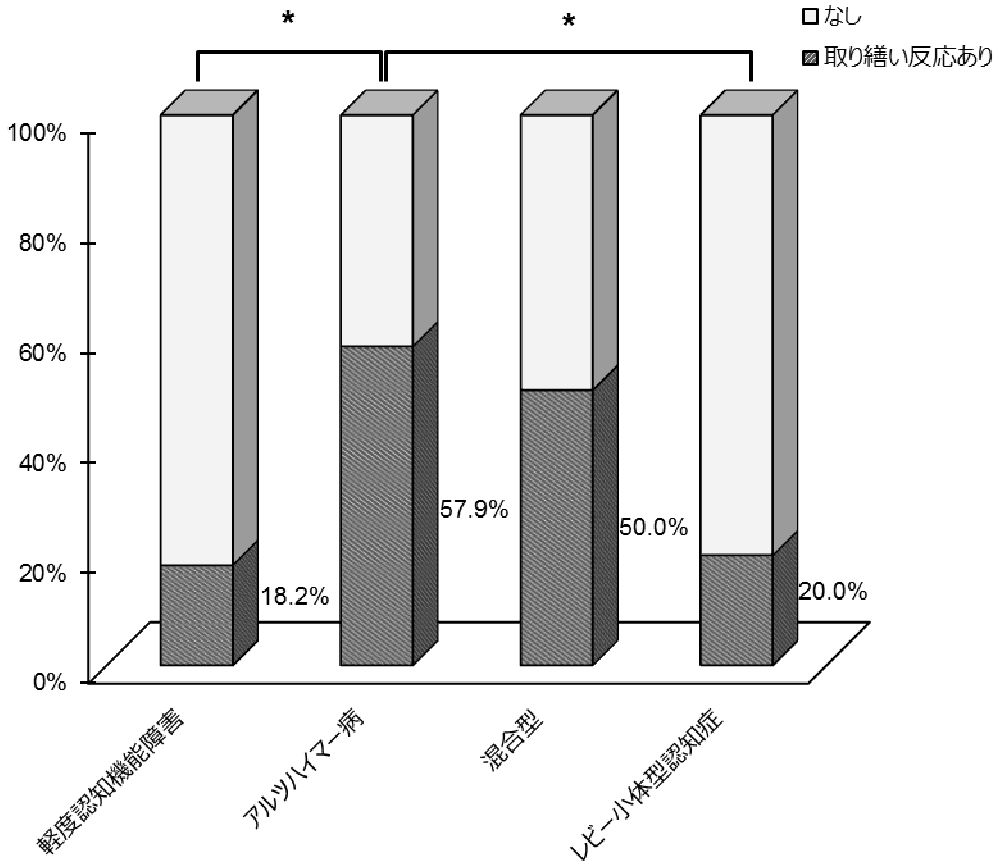

図1 アルツハイマー病、脳血管障害を有するアルツハイマー病、レビー小体型認知症、軽度認知機能障害における取り繕い反応の比較

（論文情報）

【論文名】Are saving appearance responses typical communication patterns in Alzheimer's disease?

【著者名・所属】

松下正輝（熊本大学大学院生命科学研究部附属臨床医学教育研究センター）

矢田部裕介（熊本県精神保健福祉センター）

小山明日香（熊本大学大学院生命科学研究部神経精神医学分野）

勝屋朗子　（熊本大学大学院生命科学研究部神経精神医学分野）

伊地知大亮（熊本大学大学院生命科学研究部神経精神医学分野*
／現・厚地脳神経外科病院リハビリテーション科）

宮川雄介（熊本大学大学院生命科学研究部神経精神医学分野）

池嵜寛人（熊本保健科学大学保健科学部リハビリテーション学科
言語聴覚学専攻）

古川昇（熊本大学大学院生命科学研究部附属臨床医学教育研究センター）

池田学（熊本大学大学院生命科学研究部*
／現・大阪大学大学院医学系研究科精神医学分野）

橋本衛（熊本大学大学院生命科学研究部神経精神医学分野）

* 本研究成果研究時の所属

【掲載雑誌】PLOS ONE

【doi】10.1371/journal.pone.0197468

【研究支援】本研究は文部科学省科学研究費の補助を受けて実施したものです。

【お問い合わせ先】
熊本大学大学院生命科学研究部附属臨床医学教育研究センター
担当：松下正輝（特任助教）
電話：096-373-6843
e-mail：
matsushita@kuh.kumamoto-u.ac.jp